

今回の特集は上位頸椎疾患の病態・診断・治療(RA 除く)で、アプローチ、術式から、外傷、Chiari 奇形や空洞症、Down 症候群の環軸椎転位、crowned dens 症候群、環軸椎変形性関節症と、上位頸椎に特化した興味深い内容となっている。

脊髓空洞症は私の学会発表した最初の症例であり思い出が深い。1984年に卒業したときに大学に運よくMRIが導入されつつあったので、空洞症の発表は1985年だったと思う。矢状断が撮れる、空洞症が直接見えるなどのMRIの有用性を発表したわけだが、gold standardがないので少し苦勞した。その少し以前からその頃までは非イオン性造影剤で硬膜嚢内投与が可能なメトリザマイドによるミエログラフィーのあとにCTを行うのが最もよい脊髄の評価法とされてきたが、たとえ空洞内に造影剤が移行する場合でも時間がかかり、十分なコントラストが得られず、CTでの診断は難しかった。MRIがよいのは明らかなのだが、画期的すぎて本当かどうかわからないという状態であった。また、MRI特有の空洞症に似たアーチファクトとして、truncation (Gibbs) アーチファクトがあり、フーリエ変換時の分解能と空洞様所見の関係についての論文をよくわからないながらも読んだ記憶がある (Bronskill MJ, et al: Syring-like artifacts on MR images of the spinal cord. *Radiology* 166: 485-488, 1988)。運よくその当時のT2強調像は、その後に出てきたmultiechoのfast (turbo) スピンエコー法とは異なり、流れのアーチファクトはそれほど強くはなかった。

さて、回顧はそのくらいとして、関東では2月初旬は青空が広がり、空気は澄んで、少し肌寒いが爽やかな、五月晴れではないかと思うくらいの天候であった。このまま行くと地球温暖化のために、2月が1年で最もよい気候となるのでは？と爽やかな中にも、これでよいのかと思うところがあった。その後寒波が来て、雪も舞うようになり、寒いながらも少しホッとしている。CT、MRIなどの画像診断に関しては、大いに変わってよいと思うが、気候はあまり変わってほしくない(少なくとも、これ以上夏が暑くなってほしくない)と思うこの頃である。

(青木茂樹)

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

萬年 徹 高橋 昭 金田清志
小山素磨 小柳知彦 田代邦雄
国分正一 服部孝道

編集委員

徳橋泰明 (編集委員長)
金 彪 (副編集委員長)
青木茂樹 亀山 隆 園生雅弘
高橋敏行 高安正和 田口敏彦
谷 論 中村雅也 根尾昌志
飛驒一利 松山幸弘 山崎正志

Vol. 32 No. 3
(2019年3月25日発行)

毎月1回25日発行

1部定価 (本体2,300円+税)

(配送料別)

年ぎめ予約購読料30,700円+税

送料弊社負担

発行/株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

(担当: 山岸)

印刷所/三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所/

(株)文栄社

TEL 03-3814-8541

(株)ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.
6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2019,
Printed in Japan

3COPY (出版者著作権管理機構 委託出版物)
本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前、出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。